Osaka University Knowledge Archive

Title	日本語の指示詞の研究
Author(s)	堤, 良一
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51192
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

氏　　名	堤　良一
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第　31　号
学位授与年月日	平成15年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	日本語の指示詞の研究
論文審査委員	主査　教授　三原健一
	副査　教授　杉本孝司
	副査　助教授　田野村忠温
	副査　教授　仁田義雄
	副査　教授　冨田健次

論文の内容要旨

指示詞は、ソの基本的な用法なのではなく文脈指示用法からの拡張であるとして分析が可能であり、このような立場のもとでは現場指示のソは語用論的な要請によって出現するのであるとした。

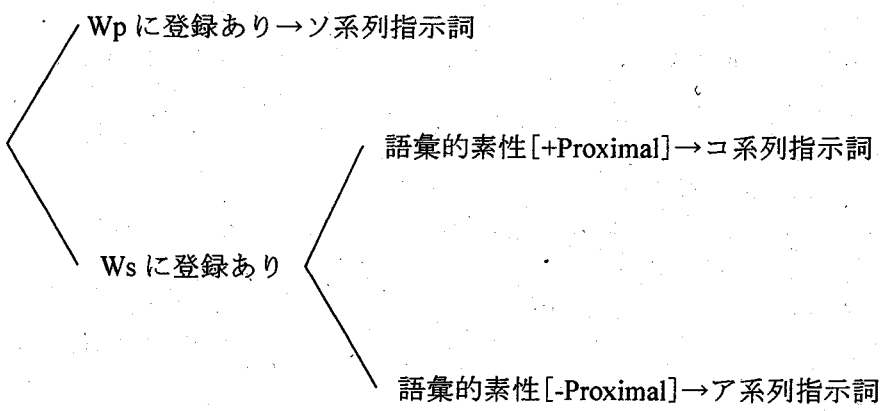
また、ア系列指示詞についてもこのモデルは有効な説明を与えてくれる。いわゆる記憶指示（金水(1999)）用法は、聞き手の知識などによって様々な制限を受けると議論されてきたが、本論のモデルを用いれば、田窪・金水(1996)らが主張するとおり、聞き手の知識は考慮する必要がないことを説明することができるばかりではなく、なぜア系列指示詞が一見共有知識を指すようなふるまいを見せるのかということについても答えを出すことが可能となった。それはこのモデルが想定する心的領域の性質を詳しく観察することにより得られる結論である。

また、文脈指示用法においてはア系列指示詞が出現しないという点についても理論的な考察によって、明確な答えを出すことができる。心的領域の要素を指すことは、翻って外的世界の要素を指すことであり、この二つの要素の間でリンクが成立していると考えると、文脈指示用法においてはこのリンクを作成することが、ある理由によってできなくなる。このことがア系列指示詞の使用を禁止するのである。

そして4.の問題についてであるが、三上(1970)以来、日本語の指示詞は三項対立なのではなく、二項対立の重層構造を成しているとする見解が一般的に採られてきた。三上はコ／ア対コ／ソという対立を考え、田窪・金水(1996)に代表されるような研究はコ／ア対ソという構図を考えた。しかし、一方で堀口(1978)は、指示詞は三つが並立に存在するような構造を考え、その傍証としてコソアの全てが使用できる場合も存在することをあげた。

本論でのこの問題に対する答えは、一種の折衷案である。本論が提出するモデルの中で

の指示詞の位置づけは以下のようなものである。



本論は日本語の指示詞の包括的・理論的記述を目指した研究である。指示詞の研究は佐久間(1951)以来、本格的にかつ活発に議論が続けられ、金水・田窪(1992)、田窪・金水(1996)などの談話管理理論による説明によって一応の決着が着いたかに見えた。しかし、庵(1997)は文脈指示用法は、そもそも未だデータの整理が完全ではなく、談話管理理論ではうまく説明ができないデータが存在することを指摘した。そしてテキスト言語学からの考察が、文脈指示用法には有効であることを主張した。

本論はこれらの研究を受け、彼らの研究の問題点を克服しつつ、指示詞の現場指示用法と文脈指示用法を統一的に捉えることが可能になるようなモデルの構築を目指した。議論の中で明らかにした点は大きく次の四点にまとめることができる。

1.指示詞とは何か。指示詞は言語のシステムの中で何をしているのか。
2.指示詞が「指示」しているものは何か。
3.現場指示用法と文脈指示用法の関連は何か。両者には全く異なった理論が必要か。それとも、統一的に説明ができるものなのだろうか。
4.コ系列ソ系列ア系列は、それぞれがどのような関係を持って成立しているのか。

1.2.については、本論のモデルが談話管理理論同様、外的世界と言語表現のインターフェイスとして存在する心的領域を扱うものであるので、指示詞はその領域に登録される要素を指し、それを言語表現に送りこむ働きをするものであると位置づけた。これは、昨今の指示詞研究においてはむしろ主流をなす考え方であり、外的世界に存在する対象を直接指示するのではないとする考えである。本論では、この考え方は文脈指示用法のみならず現場指示用法にも適用されると考え、現場指示においても指示詞は外的世界に存在する対象を直接指示しているのではないとした。

3.については、先述したとおり本論では両者は統一の理論で扱うことが可能であることを主張した。本論の中では金水(1999)、岡崎(2001)らの、指示詞の歴史的変遷に関する考察を援用し、ソ系列指示詞は文脈指示用法から現場指示用法へと拡張したものであると捉え、理論の構築もこの方向で行った。このような観察から、現場指示用法におけるソ系列これを見れば、本論ではコ／ア対ソという、田窪・金水(1996)らと同様のモデルを想定していることが窺える。しかし、このようなシステムの中での対立が必ずしも実際の使用に忠実に反映されるわけではなく、実際には次のような三者が全て現れうるような文脈も存在する。

a.僕の友達に平岩君というのがいるんだけど、そいつ／こいつ／あいつは、君にぴったりだよ。

b.こないだ旅行に行きました。その／この／あの旅行はよかったよ。

つまり、指示詞がどのような関係で成立しているかという問いに対する先行研究の立場は、どちらかが間違っているというのではなく、両者が異なった側面において正しい主張を行っていると考えるべきである。すなわち、システムの中では二項対立の重層構造をなしているものが、実際の使用では三項対立をなしているようになる場合も存在するのであると考える。

以上がおおまかな主張であるが、このような結論を導くために本論は二部構成になっている。第一部では本論に必要な概念などを紹介し、その後に文脈指示用法のソ系列指示詞について記述的な考察を行った。理論の構築には記述的な一般化は欠かすことができない。このような一般化の結果、ソ系列指示詞は意味解釈において変項として解釈され、コ／ア系列指示詞は、直接指示的な指示の仕方をするという結論を得た。

その他、本論で明らかになる問題点をいくつかあげておこう。まず、ソ系列指示詞が変項であると仮定したことにより、先行詞が指す対象と、それと照応する名詞が指す対象が異なるような場合が存在する。そのような例は「テキスト的意味」を文脈に合うようにうまく加工することによって解釈され、その解釈には指示詞ソノ N とソレの構造が関わっていることを明らかにした。

また、従来文脈指示用法のソ系列指示詞には二種類の異なるタイプが存在するということが言われてきた。一つは代行指示と呼ばれるもので、ソノのソの部分のみが先行詞と照応するような用法である。もう一方は指定指示で、これはソノ N 全体が先行詞と照応するような用法である。しかし、これは分析の上で行われる便宜的な分類であって、言語として全く異なるソノが二種類用意されているのではないことを主張した。代行指示はコノ

やアノでは言い換えることができないという庵(1995a)の指摘があるが、これとて本論のモデルをもって考えれば、ソノを一種類であるとしても説明することが可能な現象であることを明らかにした。

また、「予測裏切り的意味」をもつ文脈もソノのみが使用可能で、コノ／アノは使用できないが、これも代行指示を分析するのと同じような方法で分析することが可能であることを示した。

以上のように、本研究により明らかになった現象は数多く、また日本語の指示詞を包括的に捉えることに成功した画期的研究であると位置づけることができる。本論のモデルは、今後方言や他の言語の対照研究や第二言語習得研究に応用される可能性を持っているし、また、他の文法現象に応用できる可能性も秘めているものであると確信している。

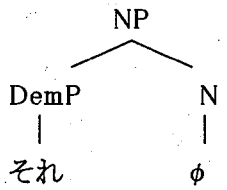
論文審査の結果の要旨

本博士論文は、佐久間(1951)の先駆的研究を直接的な契機として現在まで連綿と続く、日本語指示詞に関する包括的研究を目指したものである。指示詞については、発話場面内に存するものを「これ」「それ」などで指し示す「現場指示用法」と、文脈の中において先行する要素を「これ」「それ」などで受ける「文脈指示用法」の別があることがよく知られている。この2タイプの用法が、同一の(あるいは極めて類似する)原則に支配された実体なのか、あるいは全く別種の原則に依存する実体なのかについては、当然のことながら研究者によって意見が異なる。従って、まず記述的な側面から、複雑に絡み合ったデータを解きほぐし、正しい一般化を達成する仕事が要求される。次に、理論的な側面から、なぜそのような一般化が得られるのかを、理論的モデルを構築することによって説明しなければならない。

本博士論文は二部構成となっている。第一部「記述的研究の部」では、膨大な量の先行研究を批判的かつ建設的に検討し、曲がりくねった回廊に大規模な修正を加えつつ、堤氏(以下「著者」)独自の結論に達する。その過程で俎上に上げられるのは、佐久間(1951)・三上(1970)・久野(1973)などの古典的研究はもちろんとして、指示詞に関して綿密かつ詳細な研究を行っている庵や金水・田窪による、影響力の大きい一連の研究である。特に庵に関しては、現場指示用法と文脈指示用法が別個の原則に支配されるとする説に異論を唱え、これらは統一的に捉えられるべきものであるという議論が展開される。ここにおいて根幹をなす主張は、「ソ系列指示詞によって示される名詞句は変項である」という、反証可能性の高い(従って、科学的な)仮説である。

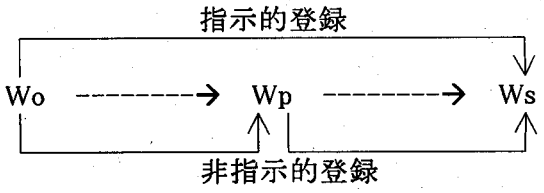
第一部に関しては、著者の分析にとって最重要点である、ソ系列指示詞が変項解釈されるという主張に質疑が集中した。その過程で、(a)「これら」「それら」など著者が議論の対象としていない複数形では、仮説と反する結果が浮上するのではないか、(b)著者が変項と言っているものは、表現は異なるが、先行研究において述べられている概念と相似するのではないか、(c)総称名詞に関する考察が欠けているのでないか、(d)主語にとっての変項と、話者にとっての変項を区別する必要があるのではないか、(e)数量詞のタイプ(strong/weak determiner)や、数解釈の問題(いわゆる maximality effect)が関わるのではないか、などの問題が審査委員から提出された。それらに対する著者の応答は概ね妥当なもので(もちろん異見はある)、考察の深さを窺い知れるものであった。

ただ、句構造を援用し、「それ」などが次の構造を取るという主張に関しては、特に主査としては疑念が残った。(DemP は Demonstrative Phrase を、ϕ は空(empty)主要部を示す。)



著者は、DemP を機能範疇とし、「それ」がその主要部になると論じているが、この機能範疇がどのような素性を照合するためのものかという議論がなされていない。また、機能範疇の主要部に「意味が付与される」という言明も、機能範疇に対する主査の理解とは相反する。本博士論文は形式意味論的な枠組みに根ざすものであり、主査が採る理論的枠組み(ミニマリスト理論)とは異なるのだが、本博士論文の当該部分はミニマリスト的な分析となっており、この理論の借用には些かの性急さが感じられた。

第二部「モデル構築の部」では、金水・田窪による談話管理理論(Fauconnier (1985)の Mental Space 理論を応用発展させたもの)が批判的に検討された後、著者独自のモデル構築がなされる。主張を簡略化して図式化すれば次のようになる。(Wo=外的世界、Wp=要素が変項として解釈される世界、Ws=話者が外界や文脈から構築する世界。)



コ系列・ソ系列を例とすると、変項の世界である Wp に登録があるものはソ系列指示詞として顕現し、Ws に直接登録されるものはコ系列指示詞として言語化されるというモデルである。日本語の指示詞に関して、このように明示的なモデルを構築した研究はこれまでにないが、これがいわゆる大風呂敷でないことは、Kripke (1972)、Kamp (1981)、Heim (1982)その他の理論に対する綿密な検証を下敷きにしていることからもそれと知れる。

このモデルについては、(a)日本語のように、指示詞が三項対立となる言語を元に構築されたものであるが、英語のような二項対立言語の分析に応用可能か、(b)登録した後の議論は詳細になされているが、そもそもどのように登録するのか(登録作業の問題)、(c)本博士論文で扱われている共時的側面だけでなく、通時的側面や言語類型をも考慮に入れる時、ア系列指示詞の分析が不十分ではないか、などの諸点に関して質疑応答がなされた。これらについては今後の課題として残された部分も多いが、従来なかった独創的かつ明示的なモデルであり、この分野における今後の研究に資するところ大であるという高い評価を受けた。

著者は日本語の指示詞について既に7年以上の研究歴を有しており、別途提出されている研究業績からも明らかなように、この分野において一定の評価を得ている。(日本言語学会大会や日本語文法学会大会での口頭発表、日本言語学会刊行『言語研究』の掲載論文、関西言語学会刊行『KLS』の掲載論文など多くの業績を参照されたい。)また、著者の一連の研究は、特に、庵功雄氏や金水敏氏などといった、この分野における最高レベルの研究者間でも注目されており、著者の主張に対して論文中で反論が提出されている。このことは、反論する価値があることの証左である。以上のことを総合的に判断し、本審査委員会は、本博士論文が博士の称号に価する十分な業績であるという結論に達した。